

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：渡邊 忍

研究課題名：ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）の地域支援に関する研究

### 研究の目的

1. ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業、以下、ファミリーホームとする）の養育者の実態や課題を把握し、地域でできる具体的な支援を検討すること
2. ファミリーホームで生活する子どもたちの生活面、心理面の課題を把握し、地域でできる具体的な支援を実践的に研究すること
3. 今後のファミリーホームの地域支援のあり方の充実に寄与すること

### プロジェクト目標の達成状況・成果内容

- ①養育者が抱えるニーズ・課題等の把握のため、4月16日から5月21日までの期間、学生（研究補助者）3名、教員1名、合計4名で5グループ編成し、5か所のファミリーホームを訪問、聞き取り調査を実施した。その後、養育者の研修、ミニカンファレンス、ケース検討会等に活用した。
- ②①の訪問の際、養育者の聞き取り調査から、ファミリーホームに入所している子どもたちが抱えている生活課題、心理的課題、などの理解を深め、具体的な支援プログラム等の作成に活用した。
- ③学生（研究補助者）たちが子どもたちのグループワークを美浜キャンパス、東海キャンパス等を活用して実施した。9回のグループワークには、延べ180名以上の子どもたちが参加した。学生の関わりで、子どもたちのエンパワーメント（仲間の存在の理解、安心感や自信を持つ、経験や成長する機会など）することができた。
- ④養育者の研修会2回、ミニカンファレンス4回、ケース検討会2回実施した。養育者のレスパイト（一時休息）や研修（子どもの養育・支援スキルの向上など）、ホーム同士の交流（お互いに助け合う）、などの機会となった。
- ⑤研究補助者として参加した学生たちは、毎回のグループワークに10名以上が参加し、子ども家庭ソ

ーシャルワーク等を実践的に学ぶことができ、ゼミ活動（専門演習）の活性化にもつながった。

- ⑥養育者、子ども、学生にとって、「双方向」に刺激を与え、お互いに高め合うことができる機会となった（好循環の相互作用が生れた）。

### 優れた成果があがった点

- ①養育者の満足度調査では、「大変満足している」3名、「満足している」3名と好評であった。具体的な成果として、「ファミリーホームを理解してもらった」「ファミリーホーム同士の交流となった」「費用が掛からなかった」「養育者のレスパイトや研修の機会となった」などあげることができる。
- ②子ども自身への調査は、倫理的配慮から実施しなかったが、養育者からみた子どもたちの成果として、「成長の機会となった」「安定となった」「経験が増えた」「学生と交流ができた」「ホームの子ども同士の交流ができた」など全員が肯定的な意見をあげている。
- ③学生（研究補助者）のグループワークへの参加状況は、平均10名以上を超えた。この事業の満足度調査では、「大変満足している」10名、「満足している」4名と大好評であった。具体的な成果として、「子どもの遊びの企画を学べた」「グループワークの方法を学べた」「子どもの接し方を学べた」「社会的養護の実態を学べた」などあげることができる。

この事業と並行して、学生たちはファミリーホームでのアルバイトやボランティア活動も続けており、「地域貢献や社会貢献に役立つ」といった意義を7割以上の学生が理解できるまでに至っている。まさに、COC事業のねらいである『ふくし・マイスターの養成』につながる成果がみられた。

### 研究期間終了後の今後の展望

①今後の事業継続の希望調査では、養育者、学生（研究補助者）ともに「是非、今後も続けてほしい」と答えた割合は 8 割を超えており、この事業継続に対する期待には高いものがある。

②事業継続については、最後のグループワーク（全体の振り返り）の中で検討していきたいと 考

えている。また、次年度の専門演習・渡邊ゼミ（新 3 年生、15 名）の学生たちと話し合いを深め、形を変えて継続していきたいと思っている。

## 2015年度「COC事業・地域課題解決型研究支援」

### 「ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）の地域支援に関する研究」

社会福祉学部 渡邊 忍（社会福祉士、臨床心理士）

#### 1 研究の目的

研究の目的は、①ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業、以下、ファミリーホームとする）の養育者の実態や課題を把握し、地域でできる具体的な支援を検討すること、②ファミリーホームで生活する子どもたちの生活面、心理面の課題を把握し、地域でできる具体的な支援を実践的に研究し、③今後のファミリーホームの地域支援のあり方の充実に寄与することを目的とするものである。

本研究の背景として、児童家庭福祉の領域では、毎年増え続ける「児童虐待」が大きな課題となっている。また、そこから派生する「社会的養護」のあり方も従来の施設養護中心のあり方から、家庭養護の積極的な推進へと変わりつつある。そこで、平成21年度に制度としてできたのが、ファミリーホームである。平成26年10月1日現在、全国で252か所(厚生労働省 家庭福祉課調べ)存在している。なお、厚生労働省の目標値は1,000か所といわれており、今後も増え続けていくことが予想される。

愛知県(名古屋市を除く)には、7か所のファミリーホームがあり、そのうち5か所が美浜町を始めとする知多半島管内に存在している。ファミリーホームには、一定の要件を満たす2人の養育者と1人の補助者（家庭的環境が確保される場合には、1人の養育者及び2人以上の補助者とすることができる）が要保護児童のうち、家庭的な養育環境の下で児童間の相互作用を活かしつつ養育を行うことが必要とされたものであって、児童福祉法第27条第1項第3号の規定に基づき措置された5、6名の子どもたちの養育にあたっている。子どもたちの多くが、虐待を受けてきた子どもたちである。

しかし、ファミリーホーム養育者や子どもたちに対する児童相談所や市町の支援体制は充分とはいえず、ファミリーホームの養育者たちの個人的な努力に期待しているところが大きい。

本研究では、目的のところで指摘したファミリーホームの実態や課題を把握し、地域でできる具体的な支援方法を探ることである。これらの取り組みをとおして、ファミリーホームの支援の質の向上を図り、児童相談所や市町にフィードバックを行い、「社会的養護」の充実にもつなげることが期待できる

#### 2 研究計画・方法、倫理的配慮

##### (1) ファミリーホーム養育者等のニーズ調査

知多半島内に所在する5か所のファミリーホーム養育者等の聞き取り調査を実施し、養育者の実態や課題を把握する。併せて、地域でできる具体的な支援を検討していく。

(2) ファミリーホームに入所している子どもたちが抱えている生活課題、心理的課題などの調査。5か所のファミリーホームの養育者等からの聞き取りから子どもたちが抱えている生活課題、心理的課題などを明確にし、地域でできる具体的な支援を検討していく。

##### (3) ファミリーホームに入所している子どもたちのグループワークの実施

専門演習Ⅰ・渡邊ゼミ（ゼミのテーマ「子ども、家族（家庭）、地域を支える実践的ソー

シャルワークを学ぶ]に集まる15名の学生を活用し、月1回、ファミリーホームに入所している子どもたちのグループワークを実施し、子どもたちのエンパワーメントを図る。グループワークを実施している間は養育者の短時間であるが、レスパイト・ケア（注1）も期待できる。

（4）ファミリーホーム養育者のケース会議の定期開催およびスーパービジョン（注2）体制の充実。現在、ファミリーホームの養育者だけの自主的なケース会議が開催されている。その会議に教員等が助言者として参加することで、会議の質を高めることが期待できる。

### （5）倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、日本福祉大学 倫理審査委員会の承認を受けている。この点については、研究補助者である渡邊ゼミの学生たちにも指導を行っている。

## 3 具体的な取り組み

	日時	プログラム	場所	参加者(教員を除く)
1	4月16日 ～ 5月21日	ファミリーホーム（以下、FHとする）5か所を訪問し、研究の目的の説明、簡単なニーズ把握、学生の紹介を実施。	5か所のFH（東海市、常滑市、大府市、美浜町）	学生15名（教員が3名単位の学生を5か所に引率）、養育者6名
2	5月24日	子どもたちのグループワーク 養育者の研修（教員が講師）	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生13名 養育者6名 子ども21名
3	6月28日	子どもたちのグループワーク 養育者のミニカンファレンス	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生12名 養育者5名 子ども22名
4	7月26日	子どもたちのグループワーク 第1回養育者のケース会議	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生14名 養育者6名 子ども23名
5	8月23日	3か所のFHを学生が3グループに分かれ訪問、交流	3か所のFH	学生7名（教員は3か所を巡回した）
6	9月27日	子どもたちのグループワーク 養育者の研修（教員が講師）	東海キャンパス 中教室	学生6名、養育者4名、子ども12名
7	11月14日	大学祭に招待（子どもたち） 養育者のミニカンファレンス	美浜キャンパス 会議室	学生9名、養育者4名、子ども13名
8	12月20日	クリスマス会 養育者のミニカンファレンス	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生13名 養育者等10名 子ども25名
9	1月31日	子どもたちのグループワーク 第2回養育者のケース会議	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生9名、養育者8名、子ども27名
10	2月28日	子どもたちのグループワーク 養育者のミニカンファレンス	美浜キャンパス Cラボ美浜	学生10名、養育者7名、子ども23名

## 4 具体的な取り組みの紹介

### (1) ファミリーホーム5か所を訪問し、ニーズの把握(4月16日～5月21日)

#### ①養育者の現状と課題

- ・子どもの塾代が限られているため、ファミリーホームの「持ち出し」が多くなる。
  - ・家事支援は親族などの協力がないと厳しい
  - ・児童相談所の入所後の支援が充分とは言えない。
  - ・何かあった時の「代替」「一時休息」が取りにくい
- <こんな支援があったら良い>
- ・学習支援、学生ボランティアの派遣(遊び相手などにもなる)
  - ・レスパイト・ケア(養育者の一時休息など)

#### ②子どもの現状と課題

- ・児童相談所からの委託に際し、施設等に比べ「情報提供(記録の引継ぎなど)」が少なすぎる。その中で、委託後の子どもの「見立て」「支援方法」を考えなければならない。
  - ・心理的ケアや家族支援に関しては、児童相談所に期待するしかないが、現実的には児童相談所は児童虐待対応に追われており、難しい面がある。
- <こんな支援があったら良い>
- ・ケース検討会等で、「見立て」「支援方法」などのスキルアップを図ることが必要である。
  - ・ホームの子どもたちが学生を介して「交流」することで、成長が期待できる。
  - ・大学構内で「遊ぶ」ことで、高校や大学のイメージが作りやすくなる。

### (2) 子どもたちのグループワーク(9回実施)

- ・9回のグループワークに延べ181名(平均20名)が参加した。グループワークは、学生たちが四季に合わせた企画を考え、広大な大学の敷地(建物等)を活用して実施した。
- ・また、遊びのための道具(大小のボール、ボードゲーム、野球盤ゲーム、シルバニアファミリーなど)を購入し、ファミリーホームでは体験できないような遊びが広がった。



「水遊びと流しそうめん」(7月26日実施)

「ドッチボール大会」(1月31日実施)

### (3) 養育者のケース検討会(2回実施)

第2回 ケース会議(2016年1月31日午前10時から13時まで)

「重症度の高い虐待を受けた小1女子の事例」

参加者：養育者等8名、教員2名、里親支援専門員1名(教員、里親支援専門員は助言者)  
養育者がケース検討会に参加している時間は、学生たちが子どものグループワークを実施

<検討事項>

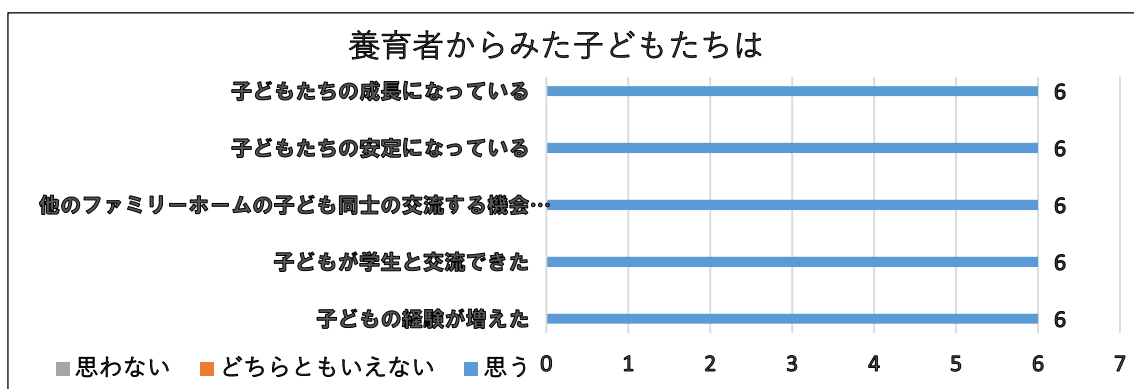
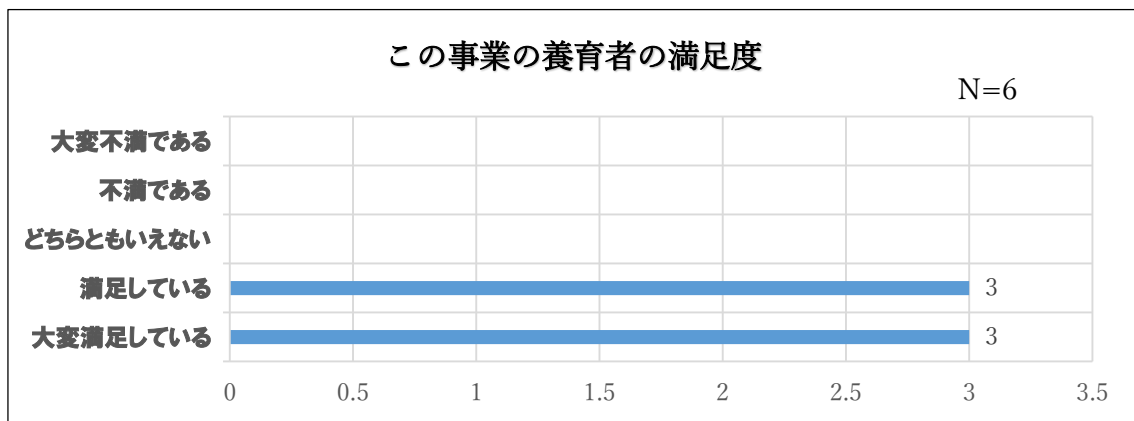
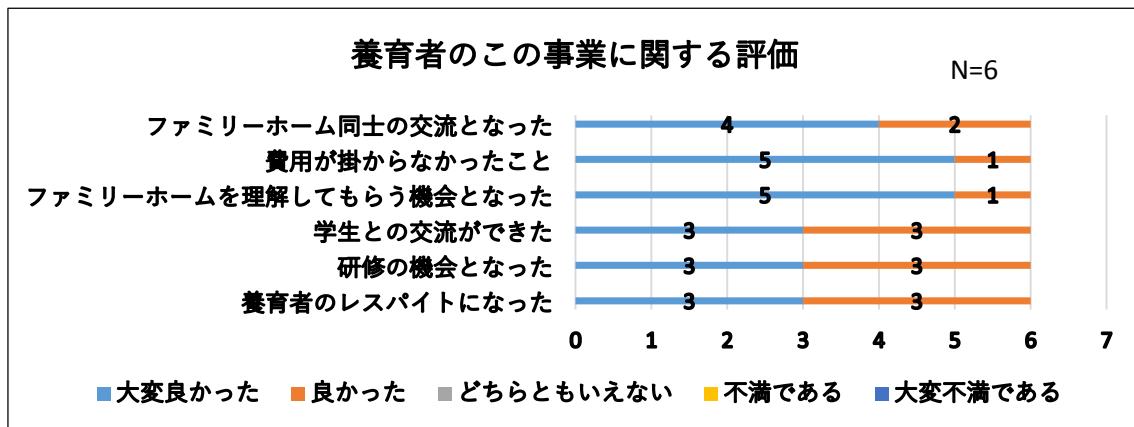
①本児の心理的状況の検討（箱庭表現をとおして）、②今後の心理教育の検討、③今後の「家族再統合」の検討。

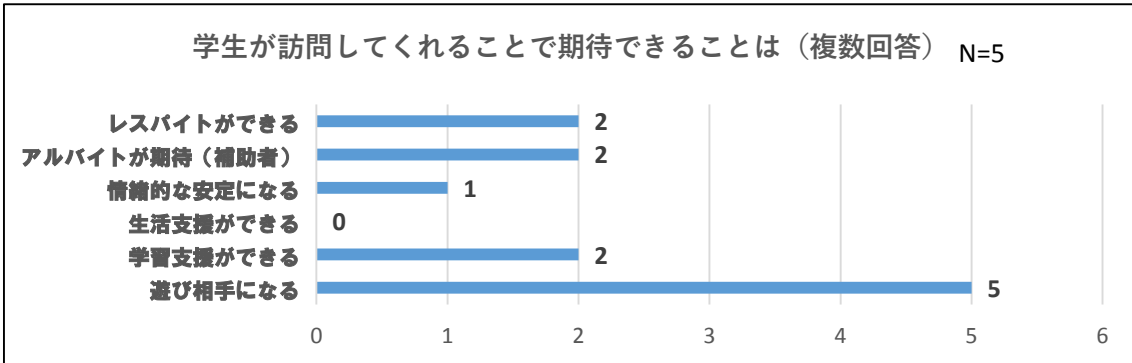
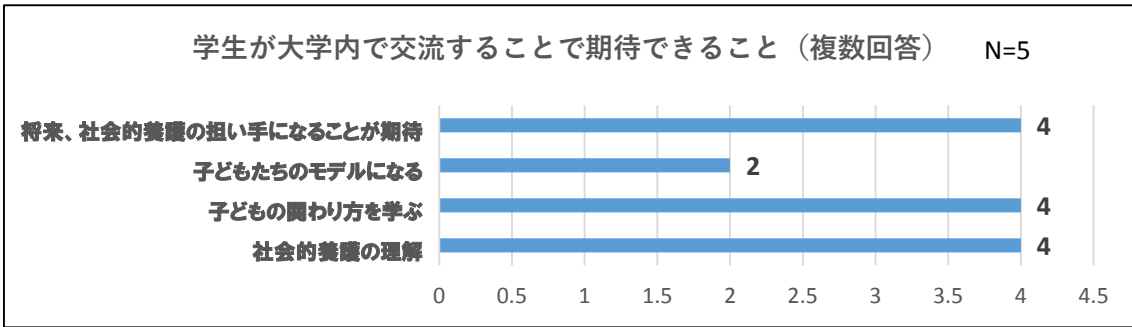
<検討結果として>

①箱庭をとおしての心理的「見立て」の説明、養育者と治療者は分離した方がいい。養育者の役割は安心感、安全感を作ること大切にされた方がいい、②発達段階に応じた、心理教育の導入（今後、起こりうる行動等を予測した対応など）の検討、③「家族再統合」のためには、児童相談所との「個別ケース検討会」を検討することが重要である、④事例のまとめ方が、分かりやすく養育者には大変参考となった。

## 5 研究の成果（評価）について

### （1）ファミリーホーム養育者からの評価

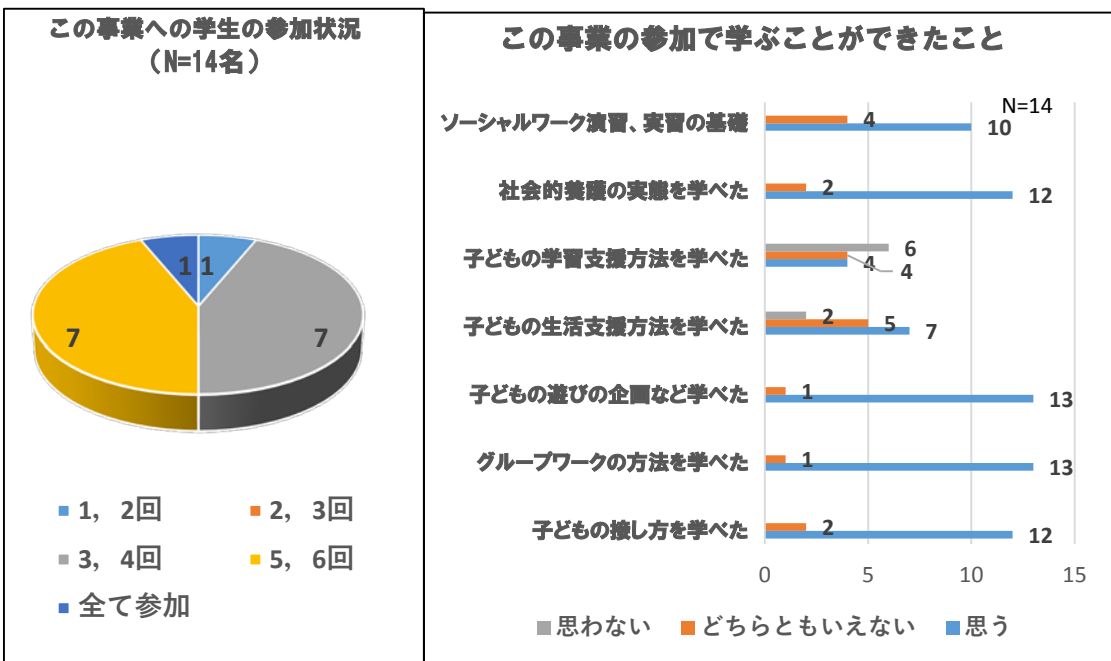


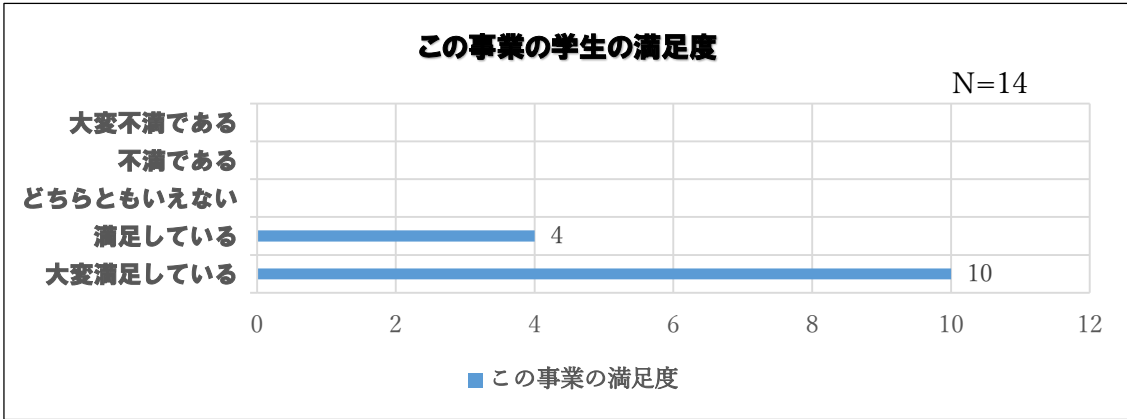
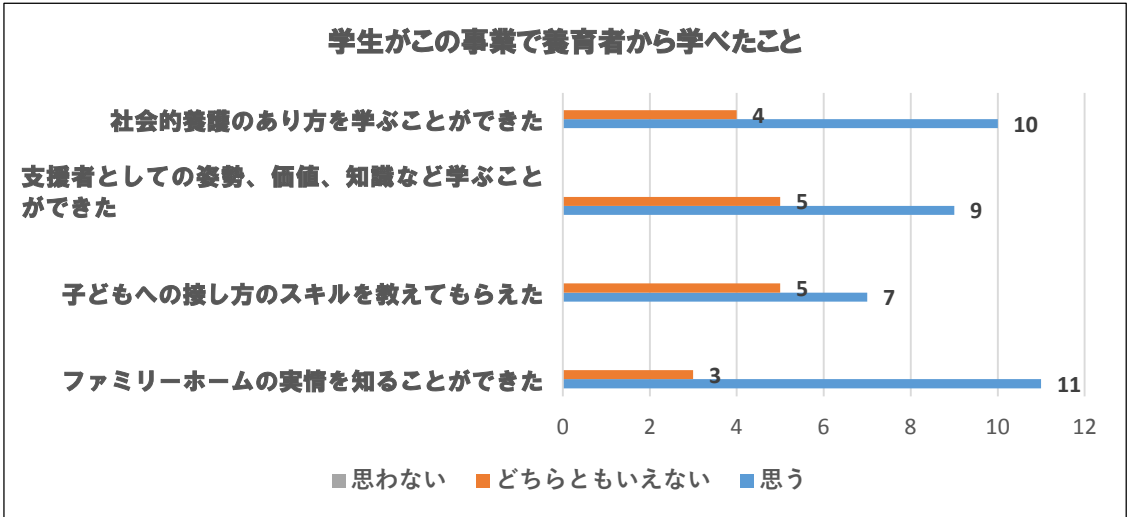


<養育者の自由記述から>

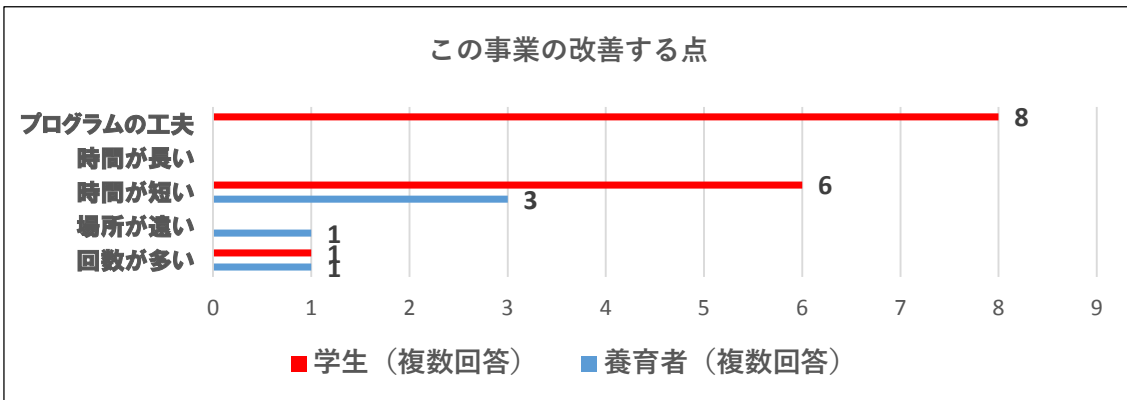
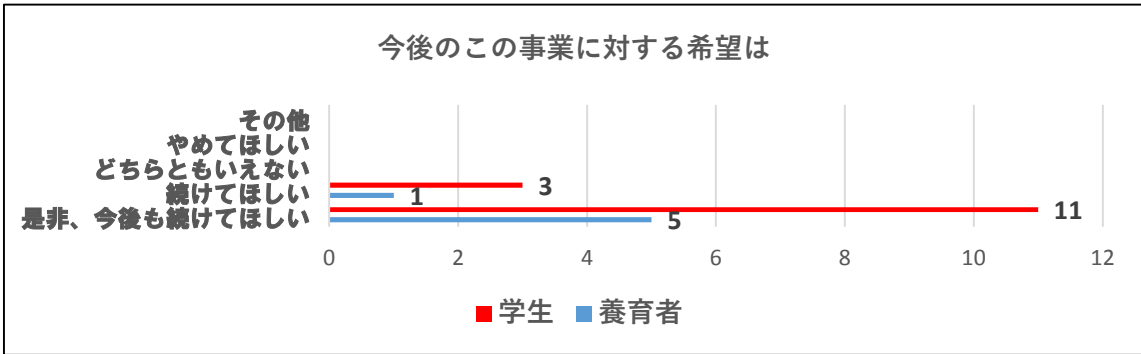
①子どもたちは、自分が一人じゃないと実感し、仲間意識が芽生えた。他のホームの子どもたちとの交流が楽しみ、②将来、大学を目指したい子どもが増えると良いと思う、③学生が1対1に近い付き合いをしてくれる。ホームではとてもできない、④中学生が日本福祉大学付属高校に行きたいというなど、「目標」が持てるようになった、⑤ホームの「密室化対策」が期待できる、養育者にとって余裕が持てるようになる、⑥学生がいろいろな個性を持つ子どもたちとの関わりが期待できる。また、社会的養護の課題を教科書以外で学ぶことができる。

(2) 参加した学生からの評価





(3) 今後のこの事業に対する希望、改善する点 (養育者、学生の調査から)





## 6 まとめ

ファミリーホーム養育者と渡邊ゼミとの出会いは、2014年度・基礎演習のゲスト講師としてゼミに招待した時から始まり、2015年度の「地域課題解決型研究支援」につながった。「子ども、家族、地域を支援する実践的ソーシャルワーク」に関心を持っている学生たちは、全員がこの「地域課題解決型研究支援」に協力し、ゼミの学習と並行して1年間取り組んできた。

この取り組みのなかで、ファミリーホームの抱えているさまざまな課題などを学生とともに学ぶことができた。養育者たちは「ベテラン（経験者・熟練者）」が多いことから、児童相談所や市町の関係者からも充分理解されていないことが多い。また、十分な休息を取ることもできず、児童虐待の被害児童を多く受け入れ、日夜苦勞しながらこういった子どもたちの支援にあたっていることが理解できた。

月1回（延べ10回）の取り組みから、養育者、子どもたち、学生たちにとっては、「トライアングル方向」でお互いに高め合うことができる機会となった。養育者は、ミニカンファレンスやケース会議等でスキルアップを図るとともに、短時間ではあるがレスパイトの時間を持つことができた。子どもたちは他のファミリーホームの子どもたちとの交流、学生たちとの交流、広大な大学での遊び等をとおして、「仲間がいる安心感」「学生との関わりでの成長」「将来、高校や大学へ行きたいといった希望」などエンパワーメントを図る機会となった。また、学生たちは子どもたちや養育者との関わりの中で、大学の講義や教科書で学ぶことができない、実践的な学びの機会となった。これらの学生たちの成長は、ソーシャルワーク実習（2015年9月～11月実施）でも発揮され、本学の社会福祉実習教育研究センターが編集した『2015年度社会福祉実習報告集』には、多くのゼミ生の実習報告書が採用・掲載されている。

また、この事業と並行して、4名の学生が養育補助者（アルバイト）として、1名の学生が学習支援者として、月数回ファミリーホームを訪問し、子どもたちとの関わりを持ち続けている。

今、児童相談所における児童虐待対応は右肩上がりに増え続け、「親子分離せざるを得ない子どもたち」も増え、「社会的養護のあり方」が大きな転換期を迎えている。そのなかで、ファミリーホームや里親といった「家庭養護」の推進が図られようとしている。しかし、「家庭養護」の地域支援については十分な体制ができているとは言い難い。今回の取り組みは、大学といった社会資源（教室、広場、学生、教員等）を使ったダイナミックな「地域支援」の実践であった。そして、学生たちにとっては「ふくしまイスター」の養成であった。

今後、この研究成果を、大学、この地域だけにとどめず、「社会」に対しても「発信」していきたいと考えている。具体的には、「第11回ファミリーホーム全国研究大会関東甲信越ブロック in 横浜（2016年8月5日～6日）」の分科会で、学生たちとともにこの取り組みの「実践報告」を予定している。残された課題等については、新3年生渡邊ゼミ（専門演習）15名の仲間たちに「襻」を受け継いでいきたいと考えている。

最後に、この研究に協力してくれた6組のファミリーホームの養育者たち、子どもたち、そして、2015年度3年生渡邊ゼミ（専門演習）の学生15名に感謝を申し上げたい。

#### <注釈>

1 レスパイト・ケアとは、一般的に委託児童を養育している里親等が一時的な休息のための援助を必要とする場合に、乳児院、児童養護施設等又は他の里親等を活用して当該児童の養育を行うことを言う。この事業では、学生たちがファミリーホームの子どもたちを預かることで、養育者たちが一時的な休息を得ることなど行っていることを指している。

2 スーパービジョンとは、一般的に援助者の資質の向上のため、熟練した指導者が助言、指導等を行うことを言う。この事業では、教員等が養育者のケース会議に参加し、子どもの見立てや支援の方法等を一緒に検討することで、養育・支援の質の向上を図ることを指している。